

(みちのものがたり) 閉伊街道 岩手県宮古市～盛岡市 いのちの道拓いた伝説の聖

有料記事

2020年4月4日 3時30分



JR腹帯駅近くでは、閉伊川に架かる国道106号の橋（左奥）と、その向こう側で建設中の宮古盛岡横断道路、JR山田線、旧道が複雑に交差する＝岩手県宮古市



106（ひゃくろく）急行バスは、岩手県宮古市と盛岡市の市境となる区界（くごかい）峠を走っていた。2万2千人余りが犠牲になった東日本大震災。あの日から9年の3月11日。春まだ遠く、降りしきる雪がフロントガラスに凍り付き、時折滑り落ちた。

宮古駅前を出て約90分、午後6時半をすぎた北上山地はすでに真っ暗だ。曲がりくねった坂道を下っていくバスに揺られていると、スマホの地図で確かめなければ、自分がどこに向かっているのかわからなくなった。

バスが往復するルートは片道約94キロ。その名の通り、宮古と盛岡を結ぶ国道106号に、ほぼ重なる道のりだ。閉伊（へい）川に沿って開かれた旧道がルーツで、閉伊街道や宮古街道とも呼ばれる。

三陸沿岸部と内陸部をつなぐ暮らしに欠かせない国道だが、急な坂やカーブが続く、事故が多発する難所も少なくない。迂回（うかい）路は乏しく、台風や豪雨で土砂崩れが起きると沿道の一部地域は陸の孤島となる。

いま国道106号は復興支援道路「宮古盛岡横断道路」と位置づけられ、冬は一面の雪景色となる区界峠に新しいトンネルを掘るなど、難所を回避してまっすぐな道に付け替える工事があちこちで進んでいる。

宮古盛岡横断道路の全区間の工事は来春終わり、車で約2時間かかる宮古～盛岡の移動時間が1時間半ほどに短縮される。沿岸部の観光地へのアクセス改善で復興を後押しし、災害時も人や物の往来がスムーズになるという。

*

3年前の同じころ、同じ道を富田淳治さん（58）は盛岡から宮古へ車を走らせていた。

勤めていた東京都内の会社を早期退職し、被災地の役に立ちたいと岩手県職員の復興支援要員（任期3年）に応募。退職後に巡った四国八十八カ所のお遍路を終え、和歌山県の高野山へ向かう途中で勤務先が県立宮古高等技術専門校と決まった。高野山の奥之院弘法大師御廟（ごびょう）で宮古の復興を祈念して、勇ましい気持ちで東京の自宅を後にした。

しかし、1泊2日かけてたどりついた北上山地の空は、雪こそ降っていなかったが鉛色。尾根筋にぶつかるたび、流れの向きを大きく変える閉伊川の水は濁り、路面には前年の台風の傷痕が残っていた。増水した川は護岸とともに、すぐ隣を通る国道106号の足元を削りとったのだ。

大震災と津波、そして台風。三陸沿岸部の厳しい自然を目の当たりにして迷いが頭をもたげた。「お前に何ができる。選択を誤ったか」「いやこれでいい」。自問自答した。

復興工事で働く人も多い宮古での家探しに時間がかかり、2週間ほど市街地に近い仮設住宅で過ごした。底冷えがして、心休まらない生活を垣間見た。被災地に続く苦難を思い知らされたという。

それから約3カ月。国道106号のほぼ中間点にある「道の駅やまびこ館」に立ち寄った時、たまたま手にした1枚のチラシが富田さんを引きつけた。宮古で初の市民劇を催すため、出演者やスタッフを募集するという。

文化、芸術によるコミュニティづくりを目指す試みだ。芝居は宮古に縁の深い僧侶の物語。錫杖（しゃくじょう）を持つ僧の後ろ姿を描いた「地味なチラシ」だったが、学生時代に打ち込んだ演劇への熱い思いがよみがえった。「仕事以外でも被災地に貢献したいと考えていた。これならできる」

閉伊街道の父、牧庵鞭牛（ぼくあんべんぎゅう）との出会いだった。

■演劇がつなぐ復興への希望

約300年前、現在の宮古市に生まれた鞭牛は30年に及ぶ後半生を三陸地方の道づくりに捧げた――。そんなナレーションで始まる市民劇「拓（ひら）け、いのちの道を」は2018年2月、宮古市民文化会館で2回上演された。

主人公の牧庵鞭牛は江戸時代に生きた実在の僧侶だ。凶作と飢饉（ききん）が続くなか、大雨になると閉伊川沿いの道が水没して民衆をさらに苦しめた。人が流されて命を落とすこともあったという。そうした難所の改修を決意。村人たちとともに玄翁

(げんのう) (かなづち) やつるはしを振るった。閉伊街道をはじめ山田町、釜石市などで部分改修を手がけた道の総延長は100里(約400キロ)と伝わる。

主役をつとめたのは富田さんだ。修行で鞭牛がこもったとされる岩屋を訪ねるなど役づくりに没頭。重圧の中、大役を見事に果たした。出演者とスタッフに、大入りの観客は拍手と笑顔でこたえた。

その夏、演劇集団「みやこ市民劇ファクトリー」が旗揚げし、富田さんは会長になった。19年3月、宮古盛岡横断道路の一部区間が完成すると、宮古市内であった開通式で「拓け、いのちの道を」の主題曲を仲間と歌った。鞭牛の時代と同じ喜びを感じた。「地元が期待する道路。工事関係者に感謝したい」。みちのくに開かれた、いのちの道は改修に次ぐ改修の歴史を重ねてきたのだ。

*

東日本大震災の日、宮古市教委の假屋(かりや)雄一郎さん(52)は市立図書館にある市史編さん室にいた。2週間後に発行する予定の資料集「玄翁の聖(ひじり) 鞭牛」の最後の校正を、郷土史研究家の佐々木健さん(85)としていた。

鞭牛生誕300年となる2010年の記念事業として、07年度に調査を始めた研究の集大成。「午後4時ごろに仕上げて印刷会社に持ち込み、その後は慰労会だと話していたら、ぐらぐらきた」と假屋さんは言う。

震災対策に追われ、諦めかけていた資料集の発行は、なんとか3カ月後に実現した。

人知れず街道の開削を決意し、自ら玄翁を手に道普請を始め、当初は白眼視されるが、いつしか民衆救済の真意が理解されて成就する――。劇や小説で描かれる鞭牛像だが、「元々あった閉伊川沿いの道の難所を丹念に調べ、近隣の村人の協力も得て、一緒に改修していった。伝説と推測が混同されているのです」。

牧庵鞭牛というミステリアスな名の由来もはっきりしない。牛方(うしかた)だったから僧名が鞭牛、というのも数ある言い伝えの一つだと假屋さんは考えている。

鞭牛を演じた富田さんは「道普請は情熱に突き動かされなければできない。人間くさい人だったと思う」と言う。先月、任期を終えた。宮古での3年間で、飢饉や津波、大雨などに幾度となく見舞われながら、この土地を離れず生きてきた人々の強さを痛感した。「今後も被災地に関わっていきたい」

みやこ市民劇ファクトリーも活動を続けている。会員で2年前に鞭牛を慕う少年役をつとめた県立宮古商業高校2年の豊間根美海(とよまねみう)さん(16)に先月11日、会った。

共演した中高生が集まり、オリジナル脚本を推敲（すいこう）していた。午後2時46分、手を止めて黙禱（もくとう）したという。

豊間根さんが演出も手がける舞台とは。

「引きこもりがキーワードですが、その先はネタバレになるので……」

社会派の現代劇らしい。

隔年開催することになった市民劇は、今年2月の第2回公演でも再び成功を収めた。

演劇で人の心を結ぶ新しい道。大震災10年への希望だ。

(文・富田悦央 写真・越田省吾)

■今回の道

国道106号は、北上山地を蛇行する閉伊川や籾（やな）川に沿って走る。大小のカーブがドライバー泣かせで、台風などで閉伊川沿いを並走するJR山田線とともに、たびたびダメージを受けた。江戸時代、閉伊街道を歩いていくと、宮古～盛岡間は2泊3日かかっていたという。

東日本大震災後は復興支援道路「宮古盛岡横断道路」とも呼ばれ、区界峠の新しいトンネル（4998メートル）など自動車専用道路の新設や改修工事が進む。沿岸部から内陸部の病院などに患者を搬送する救急車の縦・横揺れの緩和も課題だった。

牧庵鞭牛（1710～82）は宮古市和井内（わいない）に生まれ、21歳の年に出家したと伝わる。45歳となる1755（宝暦5）年は大凶作（宝暦の飢饉）だった。翌年に民衆を救済する托鉢（たくはつ）を申し出たとする記録が残る。閉伊川の難所の改修を実行に移したのは、48歳になる年。宮古市腹帯（はらたい）の大淵を手始めに3～5月、計10カ所の難所をのべ3608人の地元住民の力で改修したと古文書「戸川（閉伊川）通往還難所工事諸留」にある。写真は宮古市茂市（もいち）の106号そばに立つ牧庵鞭牛和尚の像。晩年も、いまの釜石市鶴住居（うのすまい）、大槌町吉里吉里（きりきり）などに続く道の難所を改修したり、橋を架けたりした。72歳の年に没。

■ぶらり

106急行バス（岩手県北バス）は宮古駅前～盛岡駅前間の運賃が2070円。JR山田線の宮古～盛岡間の運賃は1980円。宮古駅前に本社がある第三セクター三陸鉄道＝写真＝のリアス線は3月20日、昨年台風19号の被害から立ち直り、全線開通した。

宮古の海産、農産物などの直売所には、宮古駅から徒歩約10分、水曜定休の「魚菜市場」（0193・62・1521）や、「道の駅やまびこ館」（0193・85・5011）などがある。

宮古駅から車で約20分の宮古市田老地区には、大震災の津波遺構「たろう観光ホテル」＝写真＝が立つ。ホテル内部や津波の到達点などを案内する「たろう潮里ステーション・学ぶ防災ガイド」（0193・77・3305）は要予約。ガイド料（1時間）は1団体4千円。牧庵鞭牛が使ったとされる玄翁（佐々木政良さん所有）などを展示する新里生涯学習センター玄翁館（0193・72・2019）は岩手県北バス茂市バス停から徒歩約5分。

2018年10月、宮古駅前にオープンした宮古市役所（0193・62・2111）は市民交流センターなどを併設する。無料で使えるテーブルが用意された1、2階は市民の情報交換の場になっている。写真は1階交流プラザで談笑する富田淳治さんと豊間根美海さん。

■聴く

地元の昔話を伝承する取り組みをフリーアナウンサーの藤原美以子（みいこ）さんが続けている。東日本大震災の直後に宮古市の災害FMで朗読した昔話や民話などをCDにしてきた。「宮古むかしばなし」（シリーズ10巻）、「宮古の史実（宮古港海戦／花輪殿様）」などを宮古駅から車で約10分の「シートピアなあと」（0193・71・3100）で販売。鞭牛和尚の伝説のCD化も検討しているという。

■読者へのおみやげ

宮古駅前の三陸鉄道グッズ専門店で購入した「宮古駅」のキーホルダーを5人に。住所・氏名・年齢・「4日」を記し、〒119・0378晴海郵便局留め 朝日新聞be「みち」係へ。9日の消印まで有効。

◆次回は、九州を離れ北海道の新天地を目指す一家を描き、日本を代表するロードムービーといわれる映画「家族」（1970年公開）での旅路を追います。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.